

「田崎悦子ピアノ大全集」シリーズ第5夜のテーマは「世紀の架け橋」。19世紀から20世紀にかけての音楽の新たな潮流。科学技術が進歩していく社会背景の中、音楽もまた従来の音楽語法にとらわれない多種多様な音楽へと変貌していったが、その転換期のピアノ作品にフォーカスした演奏会。

何はともあれ、田崎のピアノは鮮烈である。彼女の持ち味であるダイナミック・レンジの広さに色彩感溢れるタッチ。卓抜した技巧により自在に繰り広げられる様は見事であり、彼女の表現語彙はすこぶる豊かであった。バルトーク「子供のために」Szでの簡潔美。組曲「戸外にて」では、音の構成、楽曲構造やバルトーク流リズムの要素が篤と読み解かれ、バルトークの命が宿る。続くラフマニノフの「前奏曲Op.32」では、めくるめく美しさで余韻爛々の趣。ピアノはヴィンターシ・スタインウェイCD-135とみられるが、その楽器を弾きこなすはもとより、その深淵さを余すところなく伝え、ドビュッシー「前奏曲集第一巻」での陰影の濃淡に心を酔わせた。(11月21日、東京文化会館〈小〉)